九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

街路空間における都市環境装置デザイン方法に関する研究

森田, 昌嗣

https://doi.org/10.11501/3164564

出版情報：九州芸術工科大学, 1999, 博士（芸術工学）, 論文博士
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

終論　まとめ

第８章　研究のまとめ 207

１．研究のまとめ 207
２．今後の課題と展望 215

第8章　研究のまとめ

本章では，本論全体の研究結果のまとめを行うとともに，本研究の今後の課題と展望について記すものとする。

1．研究のまとめ

本研究は，人と装置，装置相互の関係によって形成されている街路を対象空間とし，そこに設置されている構造物，工作物，製品等の人工物要素を都市環境装置と総称し，街路空間をデザインする一つの方法としての都市環境装置デザインの役割と効果について考察し，都市の人工物要素を環境形成の面からとらえなおし，その計画・設計時点でのデザイン方法を導くことを目的としたものである。

都市を構成する人工物要素であり公共財・景観財としての役割を担っている都市環境装置は，耐久消費財とされる家庭電化製品や車などの私的に所有される人工物のように単体で成立できるものではなく，都市環境装置一つひとつの互いの調和や連続など，街路や広場などの公共空間としての場の固有な環境特性との関係をデザインすることを視座に据えて研究を進めたものである。

本論は，都市環境をデザインする専門分野において都市環境装置デザインがどのような位置づけになるのかを整理するところから着手し，現状の街路などの公共事業における問題点と課題を，建設手順や管理区分によって人工物要素が分類されている側面から検討し，都市環境装置による新たな分類（類型化）の必要性と類型化にあたっての都市環境装置の概念を導くことを試みた。この都市環境装置の概念と類型化の試みが，都市内街路の現況において有効なものであるかの検証を行うために，都市内主要街路の構成要素（装置）の種類と量，配置などの分布特性と利用者の行動特性を実態調査することで，街路空間と装置と人間の利用行動の相互関係を探ってきたものである。実態調査および分析結果を歩行環境形成の面から考察することによって，都市環境装置を空間系，情報系，時間系の３つに類型化する妥当性を確認することができた。また同時に，現状の街路空間の装置における課題を解決するためには，都市環境装置による街路空間の秩序化と個性化が課題解決の一つの方向となりうる可能性を導くことができた。さらに，実態調査において公的サイン類などの情報系の装置が，種類と量の両面から街路空間を占有し，無秩序な街路環境形成の要因となっていることが明らかになり，公的サイン類の整理統合による秩序化の方法による課題解決の可能性を考察した。以上の現況の主要街路における実態調査から得られた知見を検証するために，実際の計画・設計の事例検討を通して，まず装置相互の整理統合の方法（秩序化）が果たす役割と効果について，さらに街路計画の比較事例によって，都市環境装置とそのデザインにおける秩序化と個性化の方法が果たす役割と効果を明らかにした。そして，これらの事例研究の比較考察によっ

て，街路の計画・設計においては，街路固有の環境特性を都市環境装置の概念の検討によって示した，空間を形成する観点，情報を形成する観点，そして時間を形成する観点から把握することが必要であり，それぞれの観点から構築すべき街路としての環境価値（空間価値，情報価値，時間価値）をどのように引き出すかが，都市環境装置デザインが取り組むべき基本的な考え方となることを導出した。以上の研究結果から，本論の主題である，街路の環境価値形成に連係した都市環境装置の開かれたシステムによる秩序化と個性化が，地域や場所固有の環境を有する街路の特性を活かした貴重な公共空間を形成するための街路空間における都市環境装置デザイン方法の提案へと結びつけることができた。

以下，研究の段階別に，これまでの研究結果を部別および章別にまとめる。

序論「研究の目的と位置づけ」は，研究の目的と既往の関連研究，論文の構成，そして都市環境装置の概念と類型化を試みた。

第１章「研究の目的と構成」では，研究の目的と方法および研究対象を位置づけるために，研究の背景から都市環境装置の用語を定義し，街路空間・街路景観および都市環境装置に関する既往の関連研究，並びに街路や都市環境装置と利用行動との関係に関する既往の研究と本研究との関係を明らかにすることによって，本研究の枠組みである論文の構成を示した。

第２章「都市環境装置の概念と類型化」では，多様な都市の構成要素を体系的にとらえるために，現状の都市整備における分類上の問題点と課題を，公共（街路）整備と施設整備を比較して整理するとともに，事例検討を通して都市環境装置の定義，都市環境装置デザインの概念の位置づけと，既存の分類を再構築する都市環境装置の類型化を試みた。

都市整備における既存の分類は，建設手順と管理区分によって分類されたものであり，街路での生活に欠かすことのできない歩行者用の装置類は，その大半が占有物として扱われ街路整備における補足的な要素としてとらえられている，などの問題点が明らかとなった。また，計画・設計の段階においても，この分類に準じた専門分化された計画プロセスによって進められ，各専門分野の横断的な連係が計られていないことや，近年，魅力的な公共空間が創出されているが，それらの多くが既存の機能的に分類分けされた空間領域区分にあてはまらない，公共敷地と民間敷地との複合空間などであることなど，計画・設計の専門分化，公共空間の機能的な領域区分の課題が明らかになった。これらの課題解決に向けて取り組んでいる２都市の事例検討を行った結果，機能性・効率性優先から文化的・精神的側面からの環境の価値を形成することが公共空間の計画に必要であることを導いた。特に，環境の価値形成においては，その場所の空間，情報，時間の観点からの環境因子が存在し，これらの環境因子が機能分類された構成要素を結びつけること，そ

してこれらの環境因子が，環境価値の形成においてそれぞれ空間価値，情報価値，時間価値の形成の役割を担っているとの仮説を得た。以上の考察により，都市環境装置の定義“環境因子のシステムを持つ全体子”と，都市環境装置デザインの概念“空間・情報・時間価値を都市環境装置に精神面で体系づけること”を導いた。この都市環境装置デザインの概念に基づいて，既存の都市の構成要素の関係を組み換える都市環境装置の類型化（空間系，情報系，時間系都市環境装置）を試みた。

第１部「街路空間における都市環境装置の分布特性と行動特性，そして秩序化の可能性－街路空間における都市環境装置デザイン方法に関する基礎的研究－」は，福岡市内の主要街路を実態調査街路に取り上げ，前章で提示した都市環境装置の類型化の検証を含め，街路の都市環境装置の分布特性と利用者の行動特性の街路別比較などにより，人と装置と空間の関係における現状の問題点と課題を明らかにしたものである。また，その課題解決のために都市環境装置が街路空間の「秩序化」と「個性化」にどのように関係しているか，どのような面で必要とされるか，などについて考察した。さらに，街路上に多数設置されている情報系都市環境装置（公的サイン）の実態調査を通して，装置類の整理統合が街路空間の「秩序化」のための有効な方法の可能性を有していることを導いた。都市環境装置デザイン方法に関する基礎的研究をまとめると以下のようになる。

第３章「都市内主要街路の都市環境装置の分布特性」では，福岡市内の都市内主要４街路を対象に，街路空間を構成する装置類の分布実態と街路の幅員構成ならびに周辺の環境特性との関係を実態調査し，設置基数の定量化の方法によって断面および延長方向の比較分析を行った。比較分析結果から，各装置の街路別と種類別に設置間隔を整理することによって，種類別分布間隔は，調査街路共通に一定の間隔を有する装置，また街路の環境特性や整備状況の違いによって設置間隔が異なる装置があることがわかった。設置間隔と街路景観の関係を検討すると，街路の装置は，設置間隔が短い連続景観形成要素と設置間隔の長い節景観形成要素の２種類に分けることができ，連続景観形成要素は，道路標識等の公的サイン類などの情報系の装置類と，公的サイン類や樹木，照明，プランターなどの時間系の装置類であり，節景観形成では，ベンチやバス停などの空間系の装置類が大半であることが見出せた。

そこで，歩行環境を改善する３つの課題の内，歩行空間の連続性の確保と休憩など滞留の場の確保の２課題と，都市環境装置の関係を検討した結果，歩行空間の連続性確保は，主に情報系と時間系の装置による連続景観形成に対応し，滞留の場の確保は，主に空間系の装置による節景観形成に対応することから，都市環境装置は，情報-時間系と空間系に２分類する考え方を見だした。さらに３つ目の課題，円滑な移動情報の確保のためには，情報系の

装置を中心としたわかりやすいサイン環境の構築が求められることから,情報系と時間系の装置を分けることが適切であることを考察した。

これらのことから,街路空間における都市環境装置を「空間・情報・時間系」の装置類に類型化することが,街路の計画・設計において各装置を比較検討する上で有効であることを検証した。

また,歩行空間を確保し街路景観を整えるために,設置間隔が近い装置相互の整理統合による秩序化の可能性について考察した。一方,景観整備が施された街路においては,その計画意図が装置の分布特性と関連していることが明らかなことから,街路の個性化のための都市環境装置の種類と役割を考察した。その結果,都市環境装置類が「連続景観」「節景観」形成上の役割を担い,その役割において「秩序化」と「個性化」の方法が対応する都市環境装置デザイン方法の基本的な考え方を導くことができた。この考え方が,車利用優先,整備主体や管理主体別の個別整備の結果がもたらす無秩序で無個性な街路整備の課題解決のための有効な方法となりうる可能性を指摘することができた。

第4章「都市内主要街路の空間形態・都市環境装置と行動特性の関係」では,第3章での調査街路の景観整備が施された3街路を対象に,都市内街路構成の実態調査結果によって代表的な歩行空間形態のタイプ分けを行い,行動観察調査区域を選定し,ビデオ撮影による行動観察調査から各区域別の交通量と通行動線の軌跡図により行動特性の分析を行った。

利用者(歩行者と自転車利用者)の行動特性と装置の配置特性の関係においては,特に歩行者には,内的および外的要因による「行動特性」が存在し,装置類の線状および点状の「配置特性」などが,歩行者の行動に影響を与えることが明らかになった。内的な行動特性には,歩行者が目的達成のために最短の経路を選択して行動する特性(最短経路選択型行動)と,陽射しなどを避け少しでも快適に通行できる領域を選択して行動する特性(快適経路選択型行動)があり,外的要因の行動特性としては,街路の延長方向に並行して設置された要素に沿って行動する特性(ガイドライン型選択型行動)と,進行方向に対して通行の障害となるものが少ない領域を選択して行動する特性(障害回避型行動)に整理することができた。利用行動に影響を与える装置の配置特性には,街路の延長方向に同じ種類の装置が規則正しく設置された「線状配置」が見えない境界壁を形成し「ガイドライン選択型行動」に影響を与え,「線状配置」の一部が変化している場合には,行動が変移する見えない境界壁のゲート効果が生じる傾向があることがわかった。また,延長方向に種類の異なる装置が点状配置されていても境界壁を形成するが,街路の断面方向に点状配置されている場合は,行動を拡散する効果があることなど,「配置特性」と「行動特性」との間には密接な関係があることが明らかになった。

さらに,これらの関係が,現状の街路における歩行空間の分断によるデッドスペースの形成と放置駐輪車両の誘発などの歩行空間確保の課題,そして

歩道の通行領域の混乱と民地との分断や通行の流れに沿って装置が設置されていないなど,装置の不適正配置の課題を引き起こす要因となっていることなど,街路の歩行空間の確保と,景観面と生活面での歩行環境形成における解決すべき課題を導いた。そして課題解決のためには,都市環境装置デザインの装置相互を整理統合する「秩序化」の方法が,歩行空間確保の有効な方法の一つとなりうる可能性と,また歩行環境形成においては,歩行空間形態に適応する装置配置などによる生活の場としての「個性化」の方法が適用できる可能性を導くことができた。

第5章「情報系都市環境装置(公的サイン)の整理統合による秩序化の可能性」では,前章までの街路の実態調査の結果から街路に設置されている装置類の多くを占め,都市のレジビリティ向上のための役割を担う情報系都市環境装置を代表する公的サイン類の分布特性と街路環境の関係に着目したものである。

前章までの都市内主要街路の道路規格が同等な3街路を対象に,公的サイン類の種類別の基数分布と街路構造および周辺環境との関係についての詳細実態調査と定量化による分析を行った。その結果,街路における公的サイン類は,「情報の区分別の偏り」「情報の質的不足」「景観への影響」の3つの問題点と解決すべき課題があることが明らかになった。つまり,現状の公的サイン類は,情報の区分別(種類)において分布に差異があり,情報提供において歩行者用の案内サインなどの質的不足がみられ,街路の全装置類に占める公的サインの分布量の多さや配置間隔の狭さから,無秩序な景観の要因の一つであることや,近接して設置されているために公的サインの情報提供機能を相殺する原因となっていることなどが明らかとなった。また,公的サイン類の種類別詳細調査分析からは,市街地において公的サイン類は,多数設置されているにもかかわらず,大半が車用のサイン類に占められ,歩行者に有用な情報が少なく,新規に設置されている歩行者用サインが計画的に整備された街路では幅広く分布しているが,整備されていない街路での設置がみられないなど,街路計画との関連性があること,などが明らかとなった。

これらの課題を解決するためには,特に歩行者の円滑な都市内移動のための公的サインの量的そして質的不足を補う必要性があり,その方策として現状の街路や地区別の公的サイン分布の偏りを軽減し,連携した情報を提供するための歩行者用公的サインシステムの構築が必要であることを導いた。このサインシステム構築には,都市環境装置デザインにおける情報系都市環境装置による秩序化の方法が適用できることを提示した。その方法には,装置類が多数集中する地区においては,共架・集約する整理統合の方法が,情報提供が不足している地区では,車用の標識類や他の装置類に歩行者用サインを代用・兼用・装用する整理統合の方法など,地区や街路の特性に対応した,いくつかの方法の組み合わせが有効な手段となりうる可能性を持っていること,つまり歩行空間の確保と的確な情報伝達の両面において,多種多様な公的サイン類を整理統合することの必要性を示すことができた。

第2部「街路空間形成の秩序化と個性化のための都市環境装置デザインの役割と効果－街路空間における都市環境装置デザイン方法に関する事例研究－」は，第1部の基礎的研究から導かれた，都市環境装置の秩序化と個性化の必要性と整理統合による秩序化の可能性について，実践事例とその計画・設計プロセスを比較検討することによって検証し，街路空間の形成における都市環境装置による秩序化の役割と効果を，そして秩序化を前提とした個性化の役割と効果を明らかにすることによって，街路空間における都市環境装置デザイン方法の提案に結びつけた。研究結果をまとめると以下のようになる。

第6章「街路内都市環境装置の整理統合による秩序化の役割と効果」では，第1部の基礎的研究で得た知見を，モデル街路のシミュレーションと事例研究を通して検証するものである。

都市圏の代表的なモデル街路を対象に，都市環境装置の類型別に理論上での整理統合のシミュレーションを行った。つまり，通常の分類では個別に管理区分された要素を，装置の役割区分による空間系，情報系，時間系の類型化にあてはめ，まず情報系都市環境装置での整理統合，さらに空間系，時間系都市環境装置との整理統合の2段階のシミュレーションを行った結果，モデル街路の装置は本来の機能を損なうことなく，約半数に整理することができ，都市環境装置の類型化による整理統合が，街路内装置の整理の点で有効な方法となる可能性を確認した。

そして，整理統合の方法を実践している事例研究を通して，その可能性の検証を行った結果，整理統合の方法には，情報と空間活用のための共架による方法と，街路における情報と空間の価値を引きだす集約の方法があることを導いた。また，この雑多な街路内要素を整理し価値づける「整理統合による秩序化の方法」が，都市環境装置デザインの有効な方法の一つであり，街路計画上での基本的な役割と効果を担うこと，また秩序化の方法で再構築された新しい都市環境装置が，街路の情報価値と空間価値を導き出す役割と効果をも担う方法であることを導出した。

第7章「街路計画における都市環境装置の秩序化と個性化の役割と効果－街路空間における都市環境装置デザイン方法の提案－」では，街路延長や幅員構成などの街路規格がほぼ同等で，沿道の土地利用や利用状況などの環境特性が異なる街路整備事例の比較検討を行った。比較検討に際しては，環境特性（街路のコンテクスト）の比較から，街路における環境価値「空間・情報・時間価値」と，具体的な整備実態との関係を考察した。

歩道が交通量に対して狭く，工作物や標識などの装置が乱立する晴海通りの場合は，空間の「秩序化」が最大の課題となった。この場合は，歩行者空間の確保という「空間価値」形成が最優先される。これを実現するためには，「情報価値」形成の面での整理統合による「秩序化」を計ることが必要であった。これは，「空間価値」を「情報価値」に連動させることであり，

さらに照明や植栽などの「時間価値」形成を担う都市環境装置によって，通りの表情を創る「個性化」への対応が可能となった。晴海通りに対して，歩道が交通量に対して広く，無個性な街並みが形成されている東口中央通りの場合には，空間の「個性化」が重要な課題となった。この場合，街路空間を構成する空間系都市環境装置を基本として，これに照明や植栽などの時間系都市環境装置を一体的に計画することで，個性的な表情を創ることが主目的となった。そして，標識やサインなどの情報系都市環境装置は，整理統合して空間系および時間系都市環境装置に組み込む（共架・集約など）手法を適用することとなった。これは「空間価値」を「時間価値」へ連動させ，それから「情報価値」を組み込む，晴海通りとは連動のベクトルを逆の方向に向けることを意味している。

つまり，街路規格が同等でも環境特性の違いによって，環境価値を引き出す方法が異なり，街路計画における都市環境装置デザインは，街路の環境特性が街路の構成要素（装置）を結びつける要因となり，街路の「秩序化」と「個性化」に適した環境価値の違いを見出すことが，街路計画において都市環境装置を再構築する方法となることを導いた。

本章での考察結果から，街路空間における都市環境装置デザイン方法の提案を行った。まず，環境価値形成の考え方から論を展開した。固有の環境特性を踏まえた街路計画の課題は，「秩序化」にある場合と「個性化」にある場合がある。環境価値形成は「空間価値」を基本として，「空間価値→情報価値→時間価値」という「秩序化」のベクトルによる優先順位と，「空間価値→時間価値→情報価値」という「個性化」のベクトルによる優先順位とがあることがわかった。3つの価値の関係を図化することによって＜価値形成サイクル：S-I-T Values CYCLE＞が得られ，＜価値形成サイクル＞と各系の都市環境装置との関係から＜都市環境装置サイクル：S-I-T Series CYCLE＞を整理することができた。そして，街路空間における都市環境装置デザイン方法は，＜環境価値サイクル＞と＜都市環境装置サイクル＞を連係させ，計画を進める流れに沿って統合することによって＜都市環境装置デザインサイクル＝S-I-T CYCLE＞にあらわすことができた。

街路空間における都市環境装置デザイン方法は，計画する場所の「環境特性」を読み取ることによって，現状の課題を「空間，情報，時間価値」の各系の形成の面からとらえ直すことからはじまる。三つの価値形成は，常に関連性があり，どの価値からデザインに取り組んでいくかは，街路計画の課題が「秩序化」か「個性化」のどちらを優先させるべきかによっても変化する。それぞれの都市環境装置は，各「環境価値」の連動によって導かれ，同時に他の都市環境装置と連携して街路環境を構成する必要が生じる。すなわち，空間系，情報系，時間系の都市環境装置相互の連携が最も重要となることが指摘できる。これはミクロなスケール環境の視点から街路空間を見直すことであり，「部分」から「全体」を構築すると言い換えることもできる。

以上のことから，街路空間における都市環境装置デザイン方法は，場所の

「環境特性」を読み取り，新たに形成すべき＜環境価値サイクル＞に連動する，空間系・情報系・時間系の＜都市環境装置サイクル＞のベクトルの方向を，「秩序化」と「個性化」の観点から構築する方法である，との提案に導くことができた。

最後に，都市環境装置デザイン方法を具体的に進めるために考慮すべき要件を示しておきたい。

都市環境装置デザインは，設置や管理の異なる対象を同じ土俵にあげて計画することが最も重要な要件となる。そのためには，法的な位置づけに照らした整備計画のあり方や事業化の方策の検討が必要であり，さらに関係機関との息の長い調整が求められる。現状では，計画ごとに調整業務を個別に進められているケースが多いが，将来的にはこうした視点からの社会的体制づくりが必要であると考える。

また，都市環境を左右する都市環境装置デザインには，デザインの専門家だけでなく，人を取り巻く環境や社会にかかわる幅の広い専門家の協働が求められる。そして，継続的に快適な都市環境を創り出すためには，表面的なデザイン処理に惑わされることなく，将来に向けて誇れる街にふさわしい計画であるかを，常に監視し続けることができる生活者側の参加を欠かすことはできない。特に，高度経済成長が終焉したわが国の公共事業は，これまでの行政主導型から生活者（住民）主導型への転換が始まろうとしている。街路空間などの公共空間整備も，行政などから与えられるだけの整備ではなく，利用者の立場から率先して整備計画へ参加する状況が増えている。近年，各地で活発化しているNPOなどのボランティア活動は，その契機ともいえる。生活者主導型の都市環境形成には，本研究に関連している点で，例えば公共用地と民地領域の境界を軽減し，積極的に街路沿道の民地を休憩スペースや装置の設置場所として提供することなどの実践的参加から，改善すべき課題を生活者側から探り出し環境改善のための事業化を行政などへ提言するなどの計画的参加がある。

本研究は，街路空間に設置される装置と場，そして人とのよりよい関係を構築する方法を，計画・設計の立場から提示したものである。今後の生活者主導型の都市環境形成においては，本研究の成果が，生活者の立場から現況の都市環境が抱えるさまざまな課題を抽出し，行政や関連する多分野の専門家の参画のもとで，その課題改善または解決の方策を導くためにの検討資料の一つとして役立つものと期待する。

2. 今後の課題と展望

本研究では,街路空間とその構成要素である装置と利用行動の関係における都市環境装置デザインの役割と効果に関する調査・分析,考察を行い,得られた知見から,街路空間における都市環境装置デザイン方法の提案を行ったものである。都市環境装置デザイン方法に関する研究を,さらに展開するために,今後,以下のような研究が必要であると考える。

第一には,空間面での展開が考えられる。

「要素としての部分」である都市環境装置が都市環境形成に果たす役割と効果は,本研究における街路から,広場や公園,地区といった面的な公共空間における研究が求められる。例えば,街路は地区の骨格を形成し,地区は各種の街路や敷地により構成されている。地区計画に関する研究は,本研究成果が活かせるかを含めて取り組まなければならない研究課題である。

第二には,人間行動と装置の関係に関する展開である。

本研究では,街路の利用行動に着目して論を進めたが,高齢社会における公共空間での行動と装置,空間との関係,例えばアクセシビリティの確保,バリアフリーの課題など,を探る必要がある。そのためには,本研究でも指摘したように,現状の公共空間において歩行空間自体が確保されていないなど,未だ解決できていない基本的な課題が残されており,その課題解決のためにも高齢者・障害者や妊婦などハンディを持つ人々を含めた研究が必要である。

第三には,装置の製品計画に関する展開である。

本研究は,街路空間に設置されている装置を対象として進めた。これらの装置の大半は,製造メーカーによって開発されたものが多く,その計画・設計プロセスを探る必要がある。公共または公的な空間に設置される製品の開発には,製品自体の機能や形態の関係を検討するとともに,設置される空間,そして不特定多数の人々が関与することなどへの対応を踏まえた開発の方法を研究する必要がある。

第四には,装置の維持管理・運営に関する展開である。

公共空間に設置される装置は,その性格上,耐候性やバンダリズムへの対応などといった維持管理に関係する課題がある。この課題は,設置後の装置の性能上の課題だけではなく,第三の研究とも関連した製品開発段階での課題や,住民参加の方法を含めた行政等の維持管理・運営体制づくりから維持等の経費負担などのマネジメント面での課題,使用する素材やリサイクルなどの環境資源活用の面での課題など,多岐にわたる研究課題が残されている。

著者は，これまでの既往研究［注１～２］において，第一の地区計画における都市環境装置デザイン方法の検討を行ったが，限られた地区での研究の範囲であり，今後，調査や検討事例を重ねていきたい。また，第二から第四の研究課題についても，現在，研究の端緒［注３～５］を開いたところであり，今後，より綿密な研究を進めていきたいと考えている。

特に，ここで提示した４つの展開は，公共空間における場と人と装置のよりよい相互関係を探るために，それぞれの切り口からの研究テーマを想定している。これらの研究テーマは，車社会や都市整備の効率化などを優先に進められてきた現代都市が積み残した大きな課題＜人々が快適に歩行し憩い語らい楽しめる生活の場，コミュニケーションの場の創出＞解決のための基本的な取り組みである。さらに，今後の研究においては，本研究での成果と４つの研究の展開を関係づけ，成人健常者だけでなく障害者・高齢者から子供までの多様な人々の生活行動を捉えながら，街路と広場・公園などの公共空間や民地の公開空地・ポケットパークなどの公的空間を連続体験する生活の場の形成のための具体的な都市環境装置デザイン方法の構築を目標に据えて進めていきたいと考えている。

注・参考論文

１）森田昌嗣，亀谷美幸：構成要素の秩序化による地区の再構成の方法－環境装置デザイン方法に関する研究（４），日本デザイン学会デザイン学研究，No.90，19-26，1992．3

２）森田昌嗣，亀谷美幸：地区の環境価値形成のための構成要素をつなぐ方法－環境装置デザイン方法に関する研究（５），日本デザイン学会デザイン学研究，No.91，45-52，1992．5

３）千代田憲子，森田昌嗣：けやき通り［福岡市］の街路景観エレメントと街路景観イメージの関連性－ストリートアメニティ形成方法に関する研究（１），日本デザイン学会デザイン学研究論文集，Vol.45,No.6，通巻No.132，1-10，1999．3

４）崔乘日，森田昌嗣：車止めの製品の特徴と設置上のデザイン課題－都市環境装置の製品化に関する研究（１），日本デザイン学会デザイン学研究論文集，Vol.45,No.6，通巻No.132，55-64，1999．3

５）森田昌嗣，山崎陽一：市街地の複合環境における公的サイン類の情報の配置特性－地域生活のための情報環境デザインに関する研究（１），芸術工学会誌，No.20，1999．5